# 法王庭の書物

赤城毅

ル・トリビュナル

講談社文庫

講談社文庫

常州大学図書館
藏書印

# 書物法廷（ル・トリビュナル）

赤城 毅

講談社

|著者| 赤城 毅　1961年東京都生まれ。'98年、『魔大陸の鷹』（三部作）でデビュー。本作の姉妹編『書物狩人』『書物迷宮』（ともに講談社文庫）、『書物幻戯』『書物輪舞』『書物審問』（以上、講談社ノベルス）の他、『氷海のウラヌス』（祥伝社）、『天皇の代理人』（角川春樹事務所）、『亡国の本質』（PHP研究所）など著書多数。
新刊・既刊作品に関する詳細は、
http://www.wrightstaff.co.jp/を参照。

書物法廷（ル・トリビュナル）
赤城 毅（あかぎ つよし）
© Tsuyoshi Akagi 2013

講談社文庫
定価はカバーに
表示してあります

2013年5月15日第1刷発行

発行者——鈴木　哲
発行所——株式会社　講談社
東京都文京区音羽2-12-21　〒112-8001
電話 出版部（03）5395-3510
　　販売部（03）5395-5817
　　業務部（03）5395-3615
Printed in Japan

デザイン—菊地信義
製版———凸版印刷株式会社
印刷———凸版印刷株式会社
製本———株式会社千曲堂

落丁本・乱丁本は購入書店名を明記のうえ、小社業務部あてにお送りください。送料は小社負担にてお取替えします。なお、この本の内容についてのお問い合わせは文庫出版部あてにお願いいたします。

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することはたとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。

ISBN978-4-06-277538-0

# 目次

第1話　クイナのいない浜辺……7
第2話　銀の川（ラ・プラタ）の蜃気楼……89
第3話　奥津（おくつき）城に眠れ……177
第4話　笑うチャーチル……261
あとがき……335
解説　細谷正充……342

講談社文庫

# 書物法廷（ル・トリビュナル）

赤城 毅

講談社

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

# 目次

第1話　クイナのいない浜辺……7
第2話　銀の川（ラ・プラタ）の蜃気楼……89
第3話　奥津（おくつき）城に眠れ……177
第4話　笑うチャーチル……261
あとがき……335
解説　細谷正充……342

# 書物法廷（ル・トリビュナル）

# 第1話　クイナのいない浜辺

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

# 1

海の彼方、ずっと遠くで、嵐が生まれたらしい。

空はまだ雲一つなく、鮮やかな青に輝いている。だが、寄せては返す潮騒の響きが、少しずつ大きくなっていた。

それは、環礁の内側、サンゴの城壁に守られた地にいるかぎりは、ごくかすかな変化でしかない。けれども、この島に生まれ育った子供には、風と波が荒れ狂いはじめる前兆だとわかった。

これでは、今日は飛行艇もやってこられないだろう。

島でいちばんの高台、環礁や隣の島までも見渡せる断崖の草むらに座り込んでいた少年は、麦わら帽子のあごひもを結び直した。

立ち上がったとたんに、あちこちから、ハトよりもまだ小さいぐらいの飛べない

鳥、クイナが、チュッチュッと、ネズミに似た鳴き声をあげながら駆けてくる。
この鳥は、どういうわけか人間を恐れないし、島のみんなも、けっしていじめたりしないから、とても人懐(ひとなつ)っこい。
今も、遊んでもらえるのかと思って、寄ってきたにちがいない。
背中が茶色の親鳥、真っ黒なヒナたち。
なかには、はしゃいで、お飾りでしかない翼を、せわしなくばたつかせているやつもいる。
いつもなら、日が暮れるまで、こいつらとじゃれていてもいいのだが、嵐になるとわかっていては、そうするわけにいかない。
「だめだよ、お前たち。ぼくは、もう帰らなくちゃ……ほら、離れて」
足もとを行き来するクイナを踏みつけないよう、そろそろと歩きだす。
ちょっとだけ、距離が離れたところで、一気に駆け出した。
つまらないのとでも言いたげに、あたりにネズミ鳴きの合唱があがる。それに、優しい呼び声が重なった。
「エディ、どこ……エディ？」
母さんだ。

嵐になりそうなのに気づいて、ぼくを迎えに来てくれたのだ。
さあ、帰らなくちゃ。
きっと、母さんは、蜂蜜とバターをたっぷり塗ったパンケーキとミルクを用意してくれているだろう。
「答えて頂戴、エディ……エドワード・ローリンソン、あなたはどこにいるのかしら？」
ぼくは、母さんの声に向かって、クイナたちの草むらを走り抜ける——。

老人は、もの憂げに眼を開いた。
風景は、何も変わってはいない。
海は、蒼い固体と化したかのごとくに凪ぎ、そして、静まりかえっている。
遅い午後の太陽の光は、柔らかく降り注ぎ、地上に祝福を与えていた。
全島ことごとくが観光地であるといっても過言でないハワイ島にあっては、幻のような、閑散としたありさまだった。
この浜辺は、いわば死角ともいうべき位置にあるのだ。
観光客は、北にあるカハルウ海浜公園やケアウホウのショッピングセンターに行っ

てしまう。たとえ、すぐそばに、こんなのどかな浜があったとしても、海水浴用の設備もととのっておらず、売店もないようなところには寄ってこない。

また、安息の島に来てまで、史跡見学をしたいという殊勝なものは、ここを通り過ぎて、ハワイにやってきた最初の白人であるキャプテン・ジェームズ・クックの記念碑に向かうだろう。

つまり、足を止めて、立ち寄るにふさわしいものは、何もないのだ。

だから、海岸のこのあたりには、誰もいない。

そんな場所には、孤愁を愉しむふぜいがよく似合っていた。

ひどく痩せて、おとぎばなしの魔法使いめいた印象を与えてくる老人だ。

コーカソイドに多くみられる細面に、白くなった髪を肩のあたりに届くほど長く伸ばしている。

使い込んだ薄手のコートを、袖を通さず、肩に羽織っているのも、どこか魔術師のマントを連想させた。

顔に刻まれた無数のしわから判断すれば、七十をとうに越えて、もう八十に手が届こうというぐらいの年齢だろう。

だが、歳月も、老人の眼から意志的な光を奪うことはできなかったようで、それ

が、ある種の威厳をかもしだしていた。
老人は、砂の上に直接に座って、動かないでいる。
時おり、背後の灌木の茂みから、クイナのものとおぼしき鳴き声がしても、振り返ろうともせず、倦怠とも諦念ともつかぬ彩りを帯びた灰色の瞳で、水平線を見つめているのだったが――。
やがて、老人の静謐は乱されることとなった。
海岸のずっと後ろの、堤防の斜面のほうから、誰かが近寄ってきたのだ。
草むらをかきわける音が、砂を鳴らす響きに変わったことで、そうとわかる。
老人は、振り向こうともしなかった。
意固地な、と感じられるほど、海だけに視線を注いでいた。
とうとう足音が止み、曲げた膝のあたりに人影が差す。
老人は、ようやく眼を上げて、おのが世界に侵入してきた何者かの姿を見た。
不思議な風貌をした、東洋人の青年だ。
中肉中背で、体格には、これといった特徴がない。
おもざしも、整ってはいるものの、仮面を思わせるつくりで、記憶に残りにくかった。もしも、何か、とびぬけた造作がなければ、美男と呼べないのだとしたら、その

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com